

平成20年10月6日

2008インターバイク・ラスベガス

米国最大の自転車展示会であるインターバイク・ラスベガスが今年も開催された。昨年展示会が開催されたときと比較し、米国経済には大きな変化が見られるが、展示会の様子から経済の変化を感じずることはなかった。引き続き多くの出展社及び来場者でにぎわっており、展示品もこれまでどおり高級自転車が数多く見られた。また、交通手段としての自転車にも焦点が当てられており、この分野の製品の展示も見られた。引き続き高級自転車で上層の顧客層を魅了しながら、一方で新たな商品を提案し、できるだけ多くの消費者に関心を持ってもらえるよう努力している米国自転車業界の姿勢をうかがうことのできた展示会であった。

展示会の概要

展示会の名称：インターバイク国際自転車展（interbike INTERNATIONAL BICYCLE EXPO）

会 期：平成20年9月24日～26日（他にアウトドアデモと呼ばれる屋外新モデル試乗会が9月22日・23日に実施された）

会 場：米国ネバダ州ラスベガス市 サンズ・エキスポ・アンド・コンベンションセンター

主催者名：VNU イクスポジションズ

入場者数：23,000人強（昨年：22,974人）

出展社数：1,123社（展示会事務局出展社リストによる、昨年は915社）

アウトドアデモ出展者数：122社（展示会イベントガイド掲載リストによる）

アウトドアデモ来場者数：5,000人弱

1. 活況だった展示会

米国自転車市場は今年に入り台数が増えず、市場が拡大していない状況が続いており、今回の展示会がどのような結果になるのか注目されたが、出展企業数も来場者数も昨年を上回り、展示会としては活況だった。展示会事務局の発表では、参加者の多くは米国自転車市場に対して楽観的な見方を維持していると報告している。

一年ほど前までレーサーを中心とする極めて高価な高級自転車が良く売れて、それに



乗ることが成功した人の一種のステータスにもなっている、というようなことも言われていた。その後米国経済が劇的に変化しているが、このような超高級分野の自転車販売がどう変化していくのか興味もたれている。一方、米国社会では最近環境意識が急速に高まっており、環境適合性の高い自転車に対する注目が高まっている。このことにより日常生活に交通手段として用いられる自転車の増加も期待されている。これらの複合的な背景から、今後の米国自転車市場を見通す上で、この展示会は重要な位置付けを担っており、結果として出展企業数も来場者数も多くなったということができると思われる。

2. 一見して従来と似た展示車種の中に新たな動き

こうした背景があるにもかかわらず、実際の各社の展示内容は一見したところ、これまでと大きく変化したわけでは不见受けられた。高級ロードレーサーと前後サスペンション付の重量感あふれるマウンテンバイクが引き続き展示の中心であった。これらは展示すると見栄えがするし、企業イメージを訴求させるためには、こうした目立つ車種がどうしても前面に数多く展示される。交通手段としての自転車に注目がされ始めたとはいえ、レクリエーション向けの使用が圧倒的な米国では、こうした車種が引き続き注目され、多くの来場者を引き寄せていた。業界内部の展示会なので、この傾向は更に強まる。

小さな変化として指摘しなくてはいけないのは、電動自転車であろう。ある米国主要ブランドから日本製蓄電池を搭載した電動自転車が展示されており、注目されていた。これはアシスト機能付とアシスト機能なしを切り替えられるという仕様で、自走機能はなかった。この他にも電動自転車の展示が見られ、今後米国市場でも電動自転車が増えていくのか注目される。ただ、どの企業も電動自転車を展示の中心にすえているというところはなかった。



また、交通手段としての自転車利用に対する注目度は昨年よりも高まっていた。交通手段として用いられる自転車には、電動自転車のほかに、通勤用、郊外型、折り畳み自転車などが挙げられている。特に通勤用と呼ばれる車種を展示しているところが多かった。この通勤用にはブランドにより多くのタイプが含まれており、外見はマウンテンバイクに似たものから、日本の軽快車を思わせるデザインのものまで幅広い。通勤から近所の買い物、家族での近場への外出まで、日常生活に利用できるコンセプトの自転車ということであろう。以前からこれらの自転車の展示は見られたが、今年の一部の大手完成車ブランドでは、日本の軽快車に少し似た前かごのついた自転車を出品しているところもあった。この企業は、欧州をイメージして古い町並みを背景にこの自転車を置き、前かごの中にはフランスパンとワインと野菜の入った買い物袋が入れられた大きな写真が飾られていた。更に部品メーカーの間でも、特に大手部品メーカーにおいて、完成車のこのような傾向に合わせて、通勤用向けの部品が提案されていた。しかしこの企業もこれらは数多くの展示品の中の一つとしての位置付けであり、展示の中心になっているわけではなかった。

シングルスピードは我が国業界の間で話題によく上る車種であるが、米国の一部の人の間でNJSの人気の高まっており、これに関連した日本製高級部品の人気もそれに伴って高くなっている。この車種については、まだまだ増えそうだという意見と、普通の人簡単に乗れるわけではないのでそれほど増え続けるわけではないだろうという両方の意見が聞かれた。



BMX については、引き続き専門の展示コーナーが設けられ、ここに BMX 専門メーカーや関連用品が集められていた。ここには BMX 完成車は勿論、フレーム、専用部品等の他、ウェア等が数多く出展されていた。オリンピック競技の関係でもっと出展企業が増えるかと思ったが、昨年とほぼ同様の規模であった。

3. 各社・各国の出展形態等について

今年もイタリア自転車工業会が、イタリア貿易委員会と協力して大きな共同小間を確保し、大規模な出展を行っていた。派手ではないが洗練された共通の小間装飾が行われており、いつもセンスのよさが感じられる。



台湾も共同出展を行っていたが、ここも例年通り参加企業は多かった。また、中国も共同出展を行っていた。昨年は中国からの来場者が急激に増えたという話であったが、今年はそれほど目だって中国企業や中国からの来場者が増えたという話は聞かなかった。このほか、新規出展企業コーナーとヨーロッパ村もあったが、これらはどちらも比較的地味であった。

4. アウトドアデモについて

展示会に先立ち、22日・23日の2日間、屋外で新モデルに試乗できるアウトドアデモが行われた。アウトドアデモ会場は、従来と同様ボールダーというところで、ラスベガス市内からバスで30分ほど行った、砂漠の岩山の中である。数多くの小売店や出展企業の若者が試乗に訪れていた。出展企業数は今年の110社から122社に増えた。更に展示会事務局の発表によると、初日に2,226名が参加し、二日間で今年の参加者合計を上回った、ということである。展示会本体には参加せず、このアウトドアデモだけに参加する大手企業もあり、小売店には特に注目されている。小売店の人たちにとっては、最新モデルへの試乗の機会であるとともに、普段自分の店で取り扱っていないブランドの自転車にも試乗できるので、大変人気が高い。



5. その他の関連イベント

展示会に併せてサイクリング大会が開催された。このうち24日夜に開催されたクロスベガス・サイクロクロスレースには、ツール・ド・フランスの覇者ランス・アームストロングが参加した。また、アウトドアデモ開催期間中の23日早朝には会場周辺を走るツアーも開催され展示会を盛り上げた。

一方、交通手段としての自転車利用に注目が集まっていることから、自転車の日常利用に焦点を当てたファッションショーが25日夜に開催された。自転車レースに用いられるウェアや用品ではなく、日常生活において自転車に乗るときに用いるウェアやバッグ、付属品がモデルにより紹介された。

このほか米国自転車小売協会（NBDA）は、販売促進、顧客サービス向上、米国自転車市場の現状等に関する小売店向けセミナーを開催した。このセミナーはインターバイク展終了後、全米各地で開催される地域セミナーの第1回目としての位置付けがされている。

6. 報道機関による取材

展示会事務局では如何に報道機関に展示会を取り扱ってもらえるかに毎年腐心している。報道機関に取り上げてもらうことにより、自転車業界全体が広く米国民に認知されるようになるからである。交通手段や日常生活における自転車利用に注目が集まって

いる現状では、この要望は一層高まっていることと思われる。米国自転車業界幹部の間ではインターバイク展の報道機関による取り上げが不十分なのではないか、という意見もあるように聞いており、事務局では今年も報道機関の取材に強い期待を持っていた。今年も、業界誌紙やサイクリング誌の他、地元ラスベガスの報道機関、更に大手で LA Times、USA Today、ウォールストリートジャーナル等の取材があったと報告されている。

尚、ある欧州の自転車業界紙は、インターバイク展の開催時期が遅すぎ、米国をはじめ中南米の輸入業者の一部は、インターバイク展まで待ちきれず、ユーロバイク展を訪れ、結果としてインターバイク展を訪れる海外バイヤーの数が減少している、と報道している。

7. 来年以降のインターバイクについて

2009年は今年と同じくラスベガスにおいて9月23日から25日にインターバイク展、それに先立つ9月21日、22日にアウトドアデモが、今回と同じ場所で実施されると発表されている。

以 上



この報告書は、競輪の補助金を受けて作成したものです。